

受賞者の声

若き研究者へ贈る言葉

畠山 昌則 博士
微生物化学研究所 特任部長

『世界を目指す若い医学研究者へのエール』

近年我が国の科学力の地盤沈下が声高に叫ばれ、日本はもはや科学先進国ではないという議論も耳にします。その背景として、科学技術への公的予算配分の少なさ、若手研究者の減少、国際的な研究の孤立化（貧弱な語学力、海外留学や国際共同研究の低迷）、大学改革の遅れ、など様々な要因が指摘されています。他方、日本の総人口に占める若者の数は五十年前に比べて大きく減少しており、さらに近年は情報系を中心に若者が切り拓く新ビジネスが次々と生まれています。こうした状況下では、何らかの強力なインセンティブを与えない限り、若手基礎研究者が減少するのはやむを得ないことでしょう。研究力の低下は医学系分野では特に深刻な問題です。臨床医が受け持ちの患者さんを治療しつつ世界に伍した医学研究を続けていくことはほぼ不可能でしょう。若手医師は臨床医として治療現場に専念せざるを得ず、我が国の基礎医学の多くは医学部出身以外の研究者によって支えられているのが

現状です。ただ、私はこれが問題だとは思いません。むしろ、医学系と非医学系出身の若手研究者が絶妙なバランスで協働することで、革新的な成果につながる研究者間の化学反応が生ずるチャンスが生まれるからです。

さて、今この文章を読んでいる皆さんは、多くの魅力的な人生の選択肢が存在する現代社会に育ち、あえて医学研究への道を選んだわけです。この選択には純粹な科学的な興味から特定の疾病に対する身近な個人的感情に至るまで様々な要因が関わっていると思いますが、いずれの場合にせよ、研究の道を選ぶ動機付けの強さは重要です。なぜならば、動機付けが確固なほど研究への執念・執着はより強靱になるからです。では、どうすればこの動機付けのエネルギーをより価値ある研究成果に変換できるのでしょうか。各々の人生が“偶然と必然”の複雑な絡み合いから成り立つ以上、この問いに一般解は存在しません。よって、この小文では私のこれまでの研究歴を振り返ることで、皆さんの研究に少しでも役立つヒントを見出していただければと思います。医学・生命科学という広大な領域の中から実際の研究対象を絞り込むことはきわめて



重要です。私が選んだ研究対象は「がん」でした。その理由は、当時不治の病と言われたこの病気への漠とした畏怖の念とその裏返しとしての「がん」への強い好奇心でした。重要なのは、一度しかない自分の人生を託するに値する研究対象を見出すことです。研究対象が固定化されることで、その成功に向けての最大の難関は、研究対象に残されている学問的重要度の高い未知の問題を割り出し、具体的に攻略する手段を見出すことにあります。そのために凶らずも私が選んだやり方は、自分の「研究対象Ⅱがんに」に関連した論文（とりわけ一流誌に掲載されるもの）を徹底的に読みまくり「がんに関する学問的知識は誰にも負けない」と勝手に思い込むまでに、自信過剰“になることでした。この知の武装を通して、登山に例えるならば、「がん」という巨大な山容が厚い雲間から姿を現し、その姿を（今の言葉で言うメタバースのように）俯瞰することで未だに残されている未知の謎とその謎に迫るための具体的なアプローチが見えてきたという感覚でした。数多くのタフな論文を読み漁り、その内容を自分なりに頭の中で整理・統合することは決して楽な作業ではありませんが、若い時に

集中して蓄積した知は、特別な力なり“ということなのでしょう。実際の研究活動において、期待通りの結果が出ないことは日常茶飯事です。研究の壁にぶつかった時、前進か後退かの判断は決して容易ではありませんが、安易に後退せずに実験条件の変更などを通して「粘る」ことで何らかの打開策が生まれることが多いものです。昨日よりも今日の方が僅かでも求める研究目的に近づくという日常の積み重ねがあなたの研究を brush up し、他者を唸らせる成果につながっていくはずです。

文頭で日本の研究力低下の話をしましたでしたが、基礎研究はあくまで pathfinder として未開の分野を切り拓くことに最大の喜びと価値を持つものであり、国家間での研究者数や論文の質を競うものではありません。皆さんが立派な研究者に成長した時、日本がより個性的でより魅力的な研究立国として世界から再び高い評価を受けることを大いに期待するとともに、この小文がその一助になることを望んでいます。